

# 『待賢門院堀河集』注釈（七）

加藤 睦

松本真奈美

○本稿は宮内庁書陵部蔵『待賢門院堀河集』（五〇一・五七）を底本とし、その一二二番歌から一三七番歌までの本文を掲げ、注釈を施したものである。凡例については、『立教大学 日本文学』第一〇一号所載の『待賢門院堀河集』注釈（一）を参照された。

○本注釈における和歌の引用は、特に断らない限り『新編国歌大観』に、散文の引用は『新編日本古典文学全集』によった。ただし『今鏡』は『新訂増補国史大系』、『梁塵秘抄』は『日本古典文学大系』、『宝物集』は『新日本古典文学大系』による。いずれの場合も引用に際して適宜表記を改めた。

さま変へさせおはしましし日、やがて御ともになりて  
さぶらふに、おくれ参らせぬることを思ひて  
もろともに家を出でにしかひもなくまことの道にたちお  
くれぬる

【校異】○おはしましし日―底本「をはしまして日」。「おはしまし、日」（松・群）により校訂

【現代語訳】女院さまが落飾なされた日、そのままお供になってお仕えたのに、このたびは崩御に取り残され申しあげてしまったことを思つて

御一緒に出家した甲斐もなく、このたび西方浄土に向かわれる女院さまの真の旅路に、遅れをとってしまったことだよ。

【語釈】○さま変へさせおはしましし日 待賢門院が落飾（出家）なされた日。康治元年（一一四二）二月二十六日のこと。↓【補説】○やがて そのまま。○御とも 貴人のそば近くにつき従う者。堀河が待賢門院の落飾に従って出家をし、引き続きそばに仕えたことを言う。↓【補説】○おくれ参らせぬること 待賢門院の崩御にはお供できなかったこと。「おくる」は先に死なれて後に残されるの意。待賢門院は久安元年（一一四五）八月二十二日、四十五歳で崩御。↓【補説】○もろともに 一緒に。○家を出でにし 「家を出づ」は出家するの意。「露の身の仮の宿りに君をおきて家を出でぬることぞ悲しき」（栄花物語・巻九・いはかげ・一条院出家時の詠／新古今集・哀傷・七七九では異同あり）。○まことの道 仏道における真実の道。悟りの

道。「君すらもまことの道に入りぬなりひとりや長き闇にまどはん」(後拾遺集・雑三・一〇二六・選子内親王/出家した上東門院への歌)。ここでは西方浄土に向かう待賢門院の死出の旅路をいう。○「たちおくれぬる」「たちおくる」は行動を起こすのが他より遅れる意。

【補説】待賢門院の崩御は「廿二日乙未、酉剋、待賢門院崩、(三條高倉第)」(『台記』久安元年八月)、「廿二日。酉剋。待賢門院崩給(春秋卅五)」(『本朝世紀』久安元年八月)、「八月廿二日。待賢門院崩于三條高倉第」(『百鍊抄』久安元年)などの記述から、久安元年(一一四五)八月二十二日のことと知られる。

これに先立つ康治元年(一一四二)二月二十六日、待賢門院は仁和寺の法金剛院において落飾した。この時堀河は、『本朝世紀』同日条に「是日。待賢門院(璋子)。於仁和寺法金剛院御所。有御出家事。(法名真如法)。:(中略):女房二人同為レ尼。故頭仲卿女。(号三堀川殿)。故右京大夫藤定実朝臣女。(号三中納言。)」と記されている通り、朋輩の女房中納言とともに出家を遂げている。待賢門院とどこまでも運命をともしにするという思いを示す行動であったと言える。

当該歌は、それにもかかわらず主君の死出の旅路に同道がかなわなかった痛恨の思いを歌った一首である。待賢門院の崩御後間もない時期の詠であろう。

御所にさしいでもいづかたにかとあはれにて  
一二三 これやさは舟流したるあまならん涙の浦によるかたもなし

【校異】○御所に―御まへに(松)、御前に(群) ○これやさは―これやさへ(松) ○なみたのうらに―なみたのうみに(松)、涙の海に(群)

【現代語訳】御所に仕仕しても、女院さまはどこにもいらつしやらないもの悲しく思われて

この私こそがそれでは、(古歌に詠まれた)舟を流してしまつた海人なのだろうか。悲しみの涙の浦に漂いながら、(女院様を失つて)心の拠りどころもない。

【語釈】○御所 待賢門院の御所、三条高倉第。○さしいでても 出仕しても。この表現から、堀河が待賢門院の崩御後にひと

たび里下がりをしており、しばらく後に再出仕したことが推測される。○いづかたにか 女院さまはどこにいらつしやるのか、いや、どこにもおられない。「か」は反語。○これやさは これこそがそれでは。知識を実感として理解した心境を表す。○

舟流したるあま 主君の七条后(藤原温子)を失つた際の伊勢の歌「:年経て住みし 伊勢のあまも 舟流したる 心地してよらむ方なく 悲しきに:」(古今集・雑体・一〇〇六)を踏まえ「尼」と「海人」とを掛ける。○涙の浦 大量の涙を入江にたとえた表現。同時代の用例に「わびぬれば涙の浦に身をなげてあひ見ん後の世を待たまし」(忠盛集・六八)がある。諸本に見える「涙の海」にも早く「人恋ふる涙の海にしづみつつ水の泡とぞ思ひ消えぬる」(好忠集・四四二)の例があるが、ここでは底本の本文をとる。○よるかたもなし 前掲の伊勢の歌の「:よらむ方なく 悲しきに:」を踏まえる。「心が」拠る」に

「舟が」寄る」を掛ける。「舟」「あま」「浦」「寄る」は縁語。

【補説】亡き主君の不在をあらためて思い知らされた悲しみの中、伊勢の著名歌を思い起こし、自身の境遇と重ね合わせて詠じた一首。「舟流したるあま」という語句は『和泉式部日記』の「女の歌」「袖のうらにただ我がやくとしほたれて舟流したるあまとこそなれ」にも見えるが、これは他の男の存在を「宮」に疑われた悲しみを歌ったもので、当該歌の方がはるかに伊勢の歌の詠歌事情に近い状況のもとで詠まれている。

向ひにあられたる別当べたうの、行幸に参るとて、出で立ちのひしめかるる気色も聞こゆるに、雪うち降りて

しづかにははれなるにさし置かず

一二四統拾誰たれもみな今日けふのみゆきに誘はれて消えにしあとをとふ人もなし

【校異】○まいるとて—まいらるゝとて（群） ○とふ人もなし

—とふ人もなし（群）

【校訂注記】○きえにしあとを—底本「、」をミセケチして「え」と改む

【現代語訳】向かいに住んでおられた別当が、行幸にお供として参上するというので、その準備のために人々が集まって騒ぎ立てる様子も聞こえたが、雪が降ってこちらは静かにしんみりとしていたので、（別当のもとに）置かせた歌

誰も皆、今日の雪の中、行幸に誘われて出かけてしまい、お隠れになった女院さまを偲んで訪れる人もない。

【他出】

○『続拾遺集』雑下・一三〇七

待賢門院かくれさせ給ひける御いみのほどに、やはたの行幸ときこえける日雪のふりけるに、さきさまある人もみえざりければ、三条内大臣左衛門督に侍りける時、だいはん所よりとてかのもとにつかはしける 堀川

○『後葉集』哀傷・四二一

待賢門院かくれさせ給ひて、又のとし十二月、やはたの行幸ありける日、雪のふりたりければ、彼だいはんどころより、行幸にまかりける人に申しつかはしける 堀河

○『続詞花集』哀傷・四一〇

誰もみなけふのみゆきにさそはれてきえにし跡を問ふ人もなし

待賢門院かくれさせ給ひて、五十日はてても女房たちはゆきちらではべるに、やはたの行幸ときこゆる日雪のふれるに、ときどきまある人も見えざりければ、三条の内の大まうち君の別当といひける時、院の大盤所よりとて、この家にしおかせ侍りける 堀河

たれもみなけふのみゆきにさそはれてきえにし跡をとふ人ぞなき

○『中古六歌仙』異本歌（高松宮家蔵『清輔俊恵登蓮堀河集』）

待賢門院うせさせたまひてのち、むかひにゐたりける人の行幸にまゐるとて、いでたちののしるけしききこゆるに、雪うちふりてしづかにははれなりければ、さしおかせけるたれもみなけふのみゆきにさそはれてきえにしあとをとふ人もなし

○『今鏡』卷二・すべらぎの中(括弧内は稿者注)

(待賢門院は)今の一院の御母におはしませば、いとやむごとくなくおはします。仁和寺に御堂つくらせ給ふ。こがねの一切経など書かせ給ひて、康治二年御くしおろさせ給ふ。御名は真如法とつかせ給ふとぞ。久安元年八月廿二日かくれさせ給にき。又の年の正月二日、かの院の女房の中より高倉の内の大臣の御もとへ、みな人はけふのみゆきといそぎつつ消えにしあととはとふ人もなし

顯仲の伯のむすめ、堀河の君の歌とぞ聞こえ侍りし。

○『宝物集』卷三

待賢門院かくれさせおはしまして、ほかへ渡し参らせける夜、ただひとり本所にとどまりて、よみ侍りける 堀河

たれも皆けふのみゆきにさそはれて消えにしあとをととふ人ぞなき

【語釈】○別当 藤原公教。のちの三条内大臣。康和五年(一一

〇三)〜永暦元年(一一六〇)、五十八歳。藤原实行男、母は藤原顯季女。父实行は待賢門院の異母兄のため、待賢門院の甥にあたる。久安元年(一一四五)当時、権中納言にして左衛門督と檢非違使別当を兼ねていた。○行幸 近衛天皇の石清水八幡への行幸。久安元年(一一四五)十一月九日。↓【補説】。○出で立ち 出立の準備。○ひしめかるる 「ひしめく」は人々が集まって騒ぎ立てる意。○さし置かす 差し出して置かせる。こ

とさらに送り届けるというよりも、それとなく相手の身近に置かせる。○今日のみゆき 「行幸」に折からの「み雪」を掛ける。

○消えにしあと 崩御した待賢門院の残した思い出。「消え」「跡」

は雪の縁語。

【補説】『今鏡』は当該歌の詠歌年次を久安二年(一一四六)正月二日と伝えるが、『続拾遺集』および『続詞花集』の詞書に従い、待賢門院崩御後間もない時期の近衛天皇の石清水行幸の折と見るべきであろう。すなわち森本元子氏「院政期の女流歌人―特に待賢門院堀河とその家集―」(風間書房、『講座平安文学論究』第三卷、一九八六年)の指摘の通り、久安元年(一一四五)十一月九日のことである。『台記』同日条の記事「九日庚辰、自夜雪降、今朝、積れ地八許寸、是日、天皇、幸石清水」、また『本朝世紀』同日条の記事「九日庚辰、自夜雪散。晴陰不定。是日。石清水行幸也。代始。」によればこの日は前夜から雪が降っており、当該歌の詞書に記された天候と矛盾しない。

待賢門院亡き後、御所の三条高倉第が賑わいを取り戻すことはない。いっぽう同年の閏十月には「四日乙巳。内大臣被下三除服宣旨。(権中納言实行卿以下。待賢門院御服)。(『本朝世紀』久安元年閏十月四日条)とあるように、待賢門院の異母兄藤原实行以下の服喪は宣旨により除かれた。そして十一月九日、目の前の邸宅に住む实行男公教は、行幸の供奉の準備に勤しんでいる。当該歌は、近親者でありながら故人を忘れたかのような振る舞いに覚えた悲哀を、折からの雪に寄せて公教に伝えた歌である。

なお当該歌の第二句、第三句、第五句は、同じ句またはほぼ同じ句が「鶯の鳴きつるなへに春日野の今日のみゆきを花とこそ見れ」(後撰集・雑春・一〇四四・藤原忠房)、「鶯の鳴きつる声に誘はれて花のもとにぞ我は来にける」(後撰集・春上・三五・読人不知)、「ひぐらしの鳴く山里の夕暮は風よりほかにとふ人もな

し」(古今集・秋上・二〇五・読人不知)といった古歌に見える。掛詞縁語仕立ての技巧とも相俟つて、いかにも和歌らしい措辞で構成された一首と言えるであろう。

おはしまし折にも似ず、心細くあはれに、御所のかたにも人の音もせず、ひきかへあらぬ世の心地して  
一二五 ちかの浦の君もなぎさにかへりきて涙にしづむ里のあま  
人

【校異】 ○おはしまししー底本「おはしまして」。「おはしまし、」(松・群)により校訂

【現代語訳】 女院さまの御在世中とは異なり、心細くしんみりとして、御所の方にも人の訪れもなく、打つて変わつて別の世界のような思いがして

かつて身近にお仕えた女院さまも今はおられないこの御所に帰つてきて涙に沈む、里の尼のわが身であるよ。

【他出】

○『中古六歌仙』異本歌(高松宮家蔵『清輔俊恵登蓮堀河集』)

御前のかたに人おともせで、おはしましけるをりにもに  
みあはれなりければ

ちか浦のきみもなぎさにかへりきて涙にしづむ里のあま  
人

【語釈】 ○御所 待賢門院の御所、三条高倉第。↓一二三。○ひきかへ 打つて変わつて。

○ちかの浦 千賀の浦。陸奥国の歌枕。現在の宮城県塩釜市、塩釜湾一帯をいう。「近(し)」を掛ける。「陸奥のちかの浦にて見ましかばいかに躑躅のをかしからまし」(道綱母集・六)。○なぎさ 「渚」に「無き」を掛ける。

参考「逢ふことのなぎさにしよる浪なれば怨みてのみぞ立ちかへりける」(古今集・恋三・六二六・在原元方)。○里のあま 人家の集まつているところに住む海人。「里のあま」の例は「浦風になぎきにけりな里のあまのたく藻のけぶり心よわさは」(後拾遺集・恋二・七〇六・藤原実方)に見える。当該歌では「海人」に「尼」を掛け、すでに出家をしていた堀河自身をさす。

【補説】 自らを「あま」にたとえ、主を失つた御所にとどまることの悲哀を「浦」「渚」「沈む」といった「海人」の縁語を用いて歌つた一首である。「里のあま」「かへりきて」という表現からは、作者が待賢門院の崩御後、ひとたび里下がりをしていたことが推測されよう。↓一二三。なお当該歌の第三句、第四句は、作者の父源顕仲の『堀河百首』の歌や、大治三年(一一二八)『住吉歌合』における歌に同じ句の例がある。いずれも哀傷歌ではないが、悲嘆の極みにあつた作者の脳裏には、父の作品の歌句が浮かんだものであろうか。

かへりきて見るべき身とも頼まねば今日のわかれの哀なるか  
な (堀河百首・別・一四七八)

いかにせん真野の入江に潮満ちて涙にしづむしののをすき  
な (住吉歌合・薄恋・一四)

六月十日ごろ仁和寺に出でたるに、庭も木ずゑも縁ふ  
かく茂りあひて、かすかに人影もせず、これに据ゑそ  
め給ひしころの事、ただ今の心地して、あはれ尽きせ  
ぬひぐらしの声絶えず聞きこえければ

一二六 君こふる嘆きのしげき山里はただひぐらしぞともになき

ける

【校異】○集付―玉葉（群） ○六月十日―六月の十日（松）

○にはも木すゑも―には木すゑも（松） ○すゑそめ給しころ―すゑそめ恨しころ（松）、すへそめ給ひしころ（群） ○日くらしのこゑ―日くらしの聲（群） ○た、日くらしそ―底本「た、日くらしは」。「た、日くらしそ」（松・群）により校訂

【現代語訳】六月十日頃仁和寺に出かけたところ、庭も木々の梢も緑が深く茂り合つて、わずかに人の姿も見えず、ここに初めて御堂をお建てになった頃のこと、まさしく今のような思いがして、情趣が尽きないひぐらしの声絶えず聞こえたので

木々が茂り、女院さまを恋しく思う嘆きの絶え間がないこの山里では、ただ一日中、ひぐらしが私とともに泣いていることだよ。

【他出】

○『玉葉集』雑四・二四〇九

待賢門院かくれさせ給て後、六月十日法金剛院にまゐりたるに、庭も梢もしげりあひてかすかに人かげもせざりければ、これにすみそめさせ給ひし事などたゞいまのこころしあはれつきせぬに、ひぐらしのこゑたえずきこえければ

堀川

君こふるなげきのしげき山郷はただひぐらしぞともになきける

【語釈】○六月十日ころ 待賢門院の崩御後はじめて迎える六月か。とすれば久安二年（一一四六）の晩夏である。 ○仁和寺

真言宗御室派の総本山、仁和寺。ここでは仁和寺の寺域に建立された待賢門院の御願寺、法金剛院をさす。↓一一八。 ○これに

据ゑそめ給ひしころ この地に法金剛院をお建てになった頃。↓

【補説】。 ○ただ今 他ならぬ今。「現在」の意を強調して言う。

○嘆きのしげき 「嘆き」に「木」を掛け、「嘆き」が多い意に「木」の枝葉が茂り合う意を掛ける。 ○ひぐらし 蝸。セミの一種。「ひぐらしの鳴く山里の夕暮れは風よりほかにとふ人もなし」（古今集・秋上・二〇五・読人不知）のように秋の夕暮れ時に鳴き、その声は寂しさを誘うものとされた。『玉葉集』以降の勅撰集では夏部の歌にも見られる。当該歌では一日中の意の「日暮らし」を掛ける。

【補説】待賢門院崩御後の六月、堀河は仁和寺の法金剛院に向向いた。庭にも木々の梢にも緑が深く茂り合い、深い嘆きを誘う。落慶供養の日の莊嚴がその日のように思われる一方で、あたりに往時の賑わいはなく、蝸の声が響くばかりである。当該歌は、故人ゆかりの地の絶え間ない蝸の声に寄せ、尽きせぬ悲嘆を詠じた一首である。

なお法金剛院の落慶供養が盛大に催されたのは、大治五年（一一三〇）十月二十五日のことである。角田文衛氏『椒庭秘抄―待賢門院璋子の生涯―』（朝日新聞社、一九七五年）、ならびに森本氏前掲論文が指摘する通り、『中右記』同日条に「仁和寺女院御願寺供養〔法金〇院〕」、『百鍊抄』同日条には「待賢門院供養法金剛院。〔播磨守基隆造二進之。上皇臨幸。〕」の記事がある。

七月一日いつしか萩の葉音するに

一二七 草ふかきあはらの里のすまひして露の命のほどを知る

かな

【校異】○七月一日―七月朔日（群） ○はおと―をと（群）

○あはらのさとの—あはらのさとの(松)

【現代語訳】七月一日、早くも風に吹かれる萩の葉音がするので、草深い荒れ果てた里に住んで、その草に置く露のようにはない命のほどを思い知る。ことだなあ。

【語釈】○七月一日 旧暦では秋の初めの日。待賢門院の崩御後、はじめて迎える七月一日とすれば久安二年(一一四六)のことである。○いつしか 早くも。暦の上で秋になった途端。○萩の葉音 萩の葉が風にそよぐ音。秋の訪れを知らせるものとされた。「萩の葉のそよぐ音こそ秋風の人に知らるる始めなりけれ」(拾遺集・秋・一三九・紀貫之)。

○草ふかき 仁明天皇の国忌の日に詠じた文屋康秀の歌「草ふかき霞の谷に影かくし照る日のくれし今日にやはあらぬ」(古今集・哀傷・八四六)の初句を念頭に置いたか。○あばらの里 荒れ果てた里。堀河自身の里をいうか。○露の命 風にこぼれてすぐ消える草の上の露のような、人間のはかない命。

【補説】待賢門院崩御後の秋の初め、作者堀河は再び里下がりをしてきたものか。草深い住まいに吹く萩の葉音により、作者は秋の到来を知り、草葉の上の露のようにはかない人の命を思う。待賢門院の命のはかなさのことも、もちろん念頭にあるのであろう。なお『山家集』七七九番歌詞書「待賢門院、かくれさせおはしましにける御跡に、人々またの年の御果てまで候はれけるに、…(中略)：堀川の局のもとへ申しおくりける」によれば、堀河をはじめ主だった女房たちは、一周忌までは三条高倉第に出仕していたことがわかる。よって当該歌を詠じた際に堀河が里下がりをしてきたとしても、それはごく一時的なものであったと推測される。

一二二番歌から当該歌までの七首は、待賢門院崩御直後の惑乱から、主を失った寄る辺のない思い、人の心の移るいへの嘆き、女院在世時を思い起こしての喪失感、人の命のはかなさの認識に至るまでの、悲嘆に揺れ動く作者の心を伝えている。

#### 葉草喩品

一七八 草も木もおのがさまざまおいにけりひとつの雨の注ぐし  
づくに

【校異】異同ナシ(松・群)

【校訂注記】○そそくしづくに—底本「て」をミセケチして「そく」と改む

【現代語訳】葉草喩品

草も木も、それぞれに生長したことだ。どこにでも分け隔てなく降り注ぐ一味の雨のしづくを受けて—どんな人も、それぞれに悟りに導かれることだよ。誰にでもあまねく降り注ぐ仏の教えを受けて。

【語釈】○葉草喩品 『法華経』(卷三)第五品。衆生は素質や能力に差があるが、仏の教化を受ければいずれはそれぞれ悟りを得ることを説く。

○草も木も 藤原俊成の詠じた法華経二十八品和歌の「葉草喩品」の歌に同じ歌句がある。「春雨はこのもかのもの草も木もわかず緑に染むるなりけり」(長秋詠藻・四〇七)。

○ひとつの雨 さまざまな草木に等しく降り注ぐ雨。どんな人も等しく与えられる仏の教えをたとえて言う。一味の雨。参考「ひとつ雨にうるふ草木はことなれど終にはもとかへらざらめや」(公任集・法華経二十八品和歌・葉草喩品・二六三)。「ひとつ」

は「おのがさまさま」と対をなしている。

【補説】『法華経』薬草喻品を歌題とし、その偈の一節「其雲所レ出、一味之水、草木叢林、随レ分受レ潤」に基づいて詠まれた歌である。同趣の先行歌に「大空の雨はわきてもそがねどうるふ草木はおのがしなじな」（千載集・釈教・一二〇五・源信）がある。

同時代の法華経二十八品和歌としては『長秋詠藻』所収の藤原俊成の作、そして『聞書集』所収の西行の作が著名である。うち俊成の作は詞書に「康治の比ほひ、待賢門院の中納言のきみ、法花経廿八品歌結縁のため人々によますとて、題を送りて侍りしかば、よみて送りし歌」（長秋詠藻・四〇三番歌詞書）とある通り、待賢門院女房の中納言の発意に応じたもので、康治元年（一一四二）二月二十六日の待賢門院の落飾を契機としての作と推定されている。堀河の詠じた当該歌も同じ折のものであろうか。また、待賢門院の落飾後間もない時期の康治元年（一一四二）三月十五日には「西行法師来云、依レ行二一品経、両院以下、貴所皆下給也、不レ嫌二料紙美悪、只可レ用二自筆」（『台記』同日条）と、西行が一品経和歌を勧進したことが知られている。これも同時の可能性があらう。

なお『聞書集』所収の西行の二十八品和歌は、長らく『長秋詠藻』と同時のものと考えられてきたが、近年では西行晩年の作とする説がある。（宇津木言行「西行『聞書集』の成立」『和歌文学研究』八七号、二〇〇三年十二月）。

## 寿量品

一二九 月かげは世をうき雲にかくるれど鷲の峰にはすむとこそ聞け

【校異】○かくるれと―底本ならびに諸本「かくれねと」。寿量品の趣旨により校訂

【現代語訳】 寿量品

月の光は、つらいこの世の浮雲に隠れているけれど、霊鷲山には絶えず澄んだ光を放っていると聞くことだ―私はこの世が憂きものであるのでその姿を隠すけれど、霊鷲山には常にいて、永遠に教えを説き続けると聞くことだ。

【語釈】○寿量品 如来寿量品。『法華経』（卷六）第十六品。仏が常にいると思うと人々は仏を敬う心を失ってしまふ。そうした衆生を導くための方便として仏は入滅するが、実は仏の寿命は永遠であることを説く。○月かげ 月の光。仏法の真理をたとえる。○世をうき雲にかくるれど 人々の心が迷いがちなこの世は憂きものである。私を姿を隠すけれど。「世を憂き」と「浮雲」を掛ける。参考「鷲の山まだ有明の月も見ず世をうき雲にそらがくれして」（久安百首・釈教・一二八八・待賢門院安芸）、「常在霊鷲山のこころをよめる／世の中の人の心のうき雲にそらがくれするありあけの月」（詞花集・雑下・四一五・登蓮法師）。

鷲の峰 鷲の山、霊山とも。古代インドのマカド国、王舎城の東北にある霊鷲山。釈迦が常住して説法した地と伝えられる。○すむとこそ聞け 「（月が）澄む」に「（仏が）住む」を掛ける。

【補説】前歌に続き『法華経』に因んだ歌である。第三句は底本、諸本ともに「かくれねと」とあるが、「寿量品」の趣旨に鑑み「かくるれと」と校訂した。同趣の先行歌と類似の下句を持つ

つ歌に「寿量品のころを／この世にて入りぬと見えし月なれど  
鷲の山にはすむとこそ聞け」（風雅集・釈教・二〇五四・大中臣  
輔親）がある。

雲のただよひたるを見て

一三〇 それとなき夕べの雲にまじりなばあはれ誰かはわきて眺  
めん

【校異】○みて―ナシ（群） ○集付―風雅（群）

【現代語訳】雲が漂っているのを見て

それと区別がつかない夕方の雲に、私の火葬の煙が混じったな  
らば、ああ、誰がそれを私のだと見分けて眺めてくれるであろう  
か。

【他出】

○『風雅集』雑下・一九五五

夕暮に雲のただよふをみてよめる

待賢門院堀川

それとなき夕の雲にまじりなばあはれたかはわきてながめん  
【語釈】○それとなき はっきりそれと定められない。 ○夕べ

の雲 夕方の空に浮かぶ雲。火葬の煙を連想させる。「かくしつ  
つ夕べの雲となりもせばあはれかけても誰かしのばん」（周防内  
侍集・五三／新古今集・雑下・一七四六）。 ○わきて眺めん

はっきり区別して眺めるだろうか。「雨となりしぐるる空の浮雲  
をいづれの方とわきて眺めん」（源氏物語・葵／葵上死去後の兄  
三位中将の歌）。 ↓【補説】。

【補説】当該歌は【語釈】に引いた周防内侍詠に近似する。周防  
内侍詠は詞書によれば、体調を崩して太秦に籠もり、心細く思っ

た折の歌という。なお待賢門院埋葬後の堀河自身の歌に、当該歌  
の結句と同じ「わきて眺めん」という句を用いた次の歌があり、  
参考になる。

待賢門院かくれさせ給ひにけるを、香隆寺にをさめたてま  
つりければよみ侍りける 堀河

夕さればわきて眺めんかたもなし煙とだにもならぬわかれば  
（続古今集・哀傷・一四一七）

一首の意は、夕方となつてもあれが女院さまの煙と見分けて眺  
めるすべもない、煙とさえもならなかったお別れは、というもの  
である。『台記』久安元年（一一四五）八月二十三日条には「待  
賢門院先入棺、次幸仁和尚寺三昧堂、其儀如三生存、但群臣步行、  
即安置石穴ニ云々、…（中略）…然而依御遺言」とある。崩  
御の翌日、待賢門院は遺言により火葬ではなく土葬とされたので  
あった。

心変はりたる男の、灌仏の作り物に、松に鶴のあたり  
けるおこせて

一三一 千歳まで契りし深き仲なれば松の木ず糸に鶴ぞゐにける  
【校異】○をこせて―を、こせて（群） ○集付―新拾（群）  
【現代語訳】心変わりをした男が、灌仏会の飾り物として、松に  
鶴がとまっているものを贈って寄こしてきて

あなたと私は、千年後までも添い遂げようと契りをおかわした深  
い仲なので、この飾り物にもこのように、松の梢に鶴がとまって  
いるのですよ。

【他出】 ↓一三二

【語釈】○心変はりたる男 堀河と以前深い仲にあったが、その

後心変わりをした男性。○灌仏の作り物 「灌仏」とは仏像に香水などをそそぎかけること。ここでは灌仏会、すなわち旧暦四月八日に釈迦の誕生を祝い、釈迦像に香水を注いで行う法会をいう。その灌仏会に供える飾り物。○松に鶴のみたりける 松の枝に鶴がとまっている意匠の飾り物。松と鶴とともに千年の寿命

を持つとされたため、祝意を表す。仏事の飾り物にはそぐわないか。○千歳まで契りし深き仲 千年後までも添い遂げようと約束をした深い仲。○松の木ずゑに鶴ぞゐにける 贈り届けた飾り物の意匠にちなんだ表現。

【補説】かつて深い仲にあった男が、飾り物に添えて送ってきた歌である。男は灌仏会のための届け物にかこつけて、今さらのように堀河に私的な内容の歌を寄こした。堀河の反応を見て、場合によっては復縁を試みようという思いがあったのかもしれない。

↓一三二。

といひて返しこひしかば

一三二 鶴のゐる松とて何かたのむべき今は木ずゑに波も越ええなん

【校異】○集付一同(群)

【現代語訳】と言って返歌を求めたので

鶴のとまつている松だからと言って、どうして頼りにできるでしょう。今はもうあなたは訪れては来ず、(あの古歌の末の松山のように)その松の梢を波が越えることでしょう—どんなに誓ってもまたすぐに心変わりすることでしょう。

【他出】

○『新拾遺集』恋四・一二五一

心かはりたるをとこの灌仏のつくり物に松に鶴のみたりけるをおこせて、千とせまでちぎりしふかき中なれば松の梢に鶴ぞゐにける、といひて返しをこひけるに

待賢門院堀川

鶴のゐる松とて何かたのむべき今は梢に浪もこえなん

【語釈】○返しこひしかば 一三二の作者である男が返歌を求めたので。○鶴のゐる松 鶴のとまつている松の枝。飾り物の意匠にちなみ、二人は千年後まで添い遂げようと約束した仲だと言

い送ってきた男の心をさす。○今は木ずゑに 「木ずゑ」に「来ず」を掛ける。参考「今はとてこずゑにかかる空蟬のからを見むとは思はざりしを」(後撰集・恋四・八〇三・平中興女/冷淡になった男に装束を返す折の歌)。○波も越ええなん 「波越ゆ」とは、他の人に心が移るなど、心変わりをするの意。「君をおきてあだし心をわが持たば末の松山波も越ええなん」(古今集・陸奥歌・一〇九三・読人不知)に基づく。

【補説】男は返歌を求めてきた。現代人の感覚からすれば身勝手ではあるが、堀河の歌才を知ればこそその要求でもあろう。「松」にちなんだ著名歌をふまえて「あてになりませんわ」と切り返した堀河の手腕はさすがである。

人のとし若き男の物いふ女、いたく若し、などいひけるが、まさりて若き男にあひにけると聞き、男のよまする、とてこひしに

一三三 さいいたづま結ぶをだにも若しとてつのごむ野辺にねや  
みるべき

【校異】○わかしとて—底本「わかしとて」。「わかしとて」(松)、  
「わかすとて」(群) ○ねやはみるべき—闕はみるべき(群)  
【現代語訳】ある人の歳の若い夫が深い仲となった女が、あなたは若すぎる、などと言っていたのに、さらに若い男と契りをおかしたと聞いて、夫が自分に歌を詠ませる、ということとで私に歌を所望したので

結ぶほどに生長した春の若草でさえも若いと言っておいて、草が芽吹いたばかりの野辺に寝てみるべきであろうか—妻のいる私でさえも若いと言っておいて、さらに若い男と契りをおかすとは、あきれたことです。

【語釈】○人のとし若き男 堀河の知人(女性)の、年若い夫。

○物いふ 契りをおかす。深い仲となる。 ○まさりて若き男にあひにける 主語は「人のとし若き男の物いふ女」。 ○男のよまする 「人のとし若き男」が、妻(堀河の知人の女性)に歌を求めた。 ○こひしに 主語は詞書冒頭の「人」。すなわち堀河の知人の女性。 ○さいいたづま イタドリの名。また、春の若草とも。「妻」を掛ける。「野辺みればやよひの月のはつかまでまだうら若きさいたづまかな」(後拾遺集・春下・一四九・藤原義孝)。 ○結ぶ 旅寝の枕にするために草を「結ぶ」意と、男女が契りをおかす意の「結ぶ」を掛ける。 ○つのごむ 新芽が角のように出始める。「三島江にのぐみわたる葦の根のひとよのほどに春めきにけり」(後拾遺集・春上・四二・曾祢好忠)が早い例。春、「葦」「薄」「真菰」「萩」などの植物がわずかに芽

吹く意をいう例が多い。結ぶほどに生長した若草(知人の夫)よりもさらに若い男の比喩になっている。 ○ねやはみるべき 野辺に「寝」る意と、男女が契りをおかす意の「寝」るを掛ける。  
【補説】堀河の知人の女性には、若い夫がいた。若い夫はある女とねんごろになったが、女から「あなたは若すぎるわね」などと言われていた。しかしその女がさらに若い男と契りをおかしたことが、若い夫の耳に入る。若い夫は「あの女に—言いたいので、歌を詠んでくれ」と妻に頼んだ。この図々しい要求を受け、妻は堀河に歌を依頼した。夫の浮気の顛末にあきれながらも、夫の頼みを無下に断ることはせず、和歌の名手の知人を頼ったのであるうか。依頼を受けた堀河が、若い夫の立場から、浮気相手の女に一言嫌味を言ったのが当該歌である。春の時節の出来事であったことだろう。

一三四 わたつ海はそらもひとつに見ゆればや風のまにまに波も立つらん 海うみ

【校異】○そらもひとつに—底本「そこもひとつに」。「そこもひとつに」(松)、「底もひとつに」(群)。歌意により校訂

【現代語訳】海

海は、空もひとつであるように見えるので、風が吹くにつれて波も立つのだろうか。

【語釈】○わたつ海 海。 ○そらもひとつに 底本ならびに諸本は「そこもひとつに」の形の本文であるが、他に例のない歌句であり歌意も通じないため校訂した。「空もひとつに」であれば、

近い時代の「思ひ出でよ神代も見きやあまの原空もひとつにすみの江の月」(長秋詠藻・二四七)続千載集・神祇歌・八六六・藤原俊成)など、他に用例がある。○風のまにまに 風にしたがつて。

【補説】第二句を校訂し、海をはるかに見たすと空とひとつであるように見えるので、空に風が吹くにつれて海に波が立つのだろうか、の意と解した。一首はやや理に落ちていて感があるが、上句に表現されている景は著名歌「わたの原漕ぎ出でてみればひさかたの雲居にまがふ沖つ白波」(詞花集・雑下・三八二・藤原忠通)や、やはり同時代の「わたの原潮路はるかに見たせば雲と波とはひとつなりけり」(千載集・羈旅・五三〇・藤原頼輔)の趣であろう。

一三五 夢まゆの世よの思おもひほしらるるる寢ね覚ざめめには枕まくらの露つゆぞもにおおききける

【校異】異同ナシ(松・群)

【現代語訳】枕

夢のようにほかない世の中が思い知られる夜半の寢覚めには、枕を濡らした涙の露が私とともに起きて(置いて)いることだよ。

【語釈】○枕 『古今和歌六帖』の項目に「枕」がある。また本集九三番歌は「枕の下のきりぎりす」題の歌である。○夢の世 夢のようにほかない現世。作者堀河の『久安百首』詠進歌「夢の世をおどろきながら見る程はただまぼろしの心地こそすれ」にも

用いられている語句である。↓八三。短くはかない夢から目覚めたことを暗示する。○思ひしらるる 「思ひ知る」は身にしみて理解するの意。やはり堀河の『久安百首』詠進歌「はれくもり時雨の空をながめてもさだめなき世ぞ思ひ知らるる」に見える歌句。↓六六。○寢覚め 眠っているはずの時間帯に眠れずにいること。↓【補説】。○枕の露 夜、眠れずに枕を濡らす涙をいう。同時代までの和歌における用例は未見であるが、『秋篠月清集』(六四六・一四二七)、『俊成卿女集』(二四)など、新古今歌人の家集に用例がある。○ともにおきける 「起き」に「露が」置きを掛ける。「ける」は詠嘆の意。知らないうちに枕が涙で濡れていたことを示す。

【補説】はかない夢から目覚め、この世もまた夢のようにはかないことを実感して、無常の思いに眠れずにいる夜には、自身が「起き」ているのとともに露が「置いていたことだ」と詠じた一首。恋歌ではあるが「寢覚め」をする人の「手枕」の「しづく」、すなわち涙を「露」にたとえた古歌に「秋ならで白露は寢覚めするわが手枕のしづくなりけり」(古今集・恋五・七五七・読人不知)がある。当該歌はこれを念頭に置いていようか。また【語釈】に記した通り、堀河自身の『久安百首』詠進歌と共通の語句を持つことも注目される。

一三六 秋あきふかみ風かぜのさむしろ袖そでしきてあししのの篠しの屋やにいくく夜よへぬらん

【校異】○秋ふかみーあきふかき(松) ○風のさむしろー底本

「風の聲さむしろ」。傍書により校訂。「嵐さむしろ」(松)、「風さむしろ」(群) ○いく夜へぬらん―底本「いく世へぬらん」。歌意により校訂。「いく夜へぬ覧」(群)

【現代語訳】むしろ

秋が深いので風が寒い、その狭筵に衣の袖を敷いて、葦の篠屋で幾夜過ごしたことだろう。

【他出】

○『中古六歌仙』堀河局・二六〇

筵

あきふかみそでさむしろにそでしきてあしのしほやにいくよねぬらむ

【語釈】○むしろ 藁草や藁、竹などで編んだ敷物。『古今和歌六帖』の項目に「むしろ」がある。○風のさむしろ 「風の寒(き)」と「狭筵」を掛ける。「狭筵」は幅の狭い筵、または短い筵。○袖しきて 自分の衣の袖を敷いて。○葦の篠屋 葦や篠で葺いた粗末な家。「ほととぎす語らふ声を聞きしより葦の篠屋にいこそ寝られね」(能因法師集・三五／撰津国から京の友人に送った歌)、「わが恋はいはぬばかりぞ難波なる葦の篠屋の下にこそたけ」(新古今集・恋一・一〇六三・小弁)が早い用例。葦の名所である撰津国の難波にあるものとしてしばしば詠まれる。

○いく夜へぬらん わびしい夜を幾夜過ごしたことだろう。「夜」に葦の縁語「節(よ)」を響かせる。参考「かりてはず山田の稲をほしわびて守るかりいほにいく夜へぬらん」(拾遺集・雑秋・一一二五・凡河内躬恒)。

【補説】「むしろ」を題に、風の冷たい晩秋の夜、粗末な小屋の筵

の上にとだ一人衣の袖を敷いて眠るわびしさを詠じた一首。第二・三句は「さむしろに衣かたしき今宵もや我を待つらむ宇治の橋姫」(古今集・恋四・六八九・読人不知)を念頭に置いている。「葦の篠屋」という表現から、難波あたりの旅寝をイメージしているようか。いずれにせよ、晩秋の孤独な夜の情景である。

しがのうら

一三七 よもすがらつま恋ひかねてさ牡鹿せしかのうらめしげなるあか

つきの声

【校異】○しかのうら―しかのこゑ(群)

【現代語訳】しがの浦

一晩中妻を恋い続けるのに耐えられず、さ牡鹿の恨めしそうな暁方の声が聞こえることだ。

【語釈】○しがのうら 近江国の歌枕、志賀の浦であろう。『万葉集』に見える「志珂の浦」であれば筑前国だが、平安和歌における用例は近江国の「志賀の浦」の方が多く、隠題の歌枕として選ばれた可能性が高いのは「志賀の浦」と見る。○よもすがら 一晩中。夜通し。○つま恋ひかねて 妻を慕い続けることに堪えられずに。「高砂につま恋ひかねて鳴く鹿は逢坂山にゆきて住めかし」(永承五年祐子内親王家歌合・鹿・二八・藤原兼房)が早い例。祐子内親王家に仕えた紀伊の作にも用例がある。↓【補説】。○さ牡鹿 牡鹿。秋、妻を慕って鳴くとされた。↓二六。

○うらめしげなる 恨めしげな。参考「頼めおきしほどふるままにさ夜衣うらめしげなる槌の音かな」(堀河百首・擣衣・八一五・紀伊)。○あかつきの声 暁の鳴き声。「暁」は夜明け前の

まだ暗い時間帯。堀河の父源顕仲が主催した『南宮歌合』における「伯女（堀河とは別人とされる）」の作に、類似歌「衣手の山の裾野に立つ鹿のうら淋しきはあかつきの声」（鹿<sup>暁</sup>・一一）がある。↓【補説】。

【補説】歌枕「志賀の浦」を隠題として詠み込んだ歌である。一首の意は、夜通し妻を恋い続けたのに逢えないまま暁を迎えたさ牡鹿の、恨めしそうな声が聞こえる、というもの。類似の句を持つ同時代の歌として、【語釈】にあげた以外の歌がある。

たぐひなくあはれとぞ聞くさ牡鹿のつま恋ひかねて夜半に鳴く音を  
（堀河百首・鹿・七一九・紀伊）

よもすがらつま恋ひかねて鳴く鹿の涙や野辺の露となるらん  
（山家集・四三一）

なお「あかつきの声」という歌句は八代集に三例（『古今集』六四一、『新古今集』六三一・一九六八）あるが、鹿の鳴き声について言った例はない。いっぽう同時代の諸歌集には「暁聞鹿」題（『金葉集』一二三三（皇后宮右衛門佐）、『雅兼集』三一）や「鹿」題（『山家集』四三七、『重家集』五五九、『田多民治集』六九、『頼政集』二二九など）といった歌題が見られ、源顕仲が大治三年（一二二八）に主催した『西宮歌合』『南宮歌合』『住吉歌合』にも、「鹿<sup>暁</sup>」題または「鹿<sup>暁</sup>」題が設けられている。当該歌において「さ牡鹿」の「あかつきの声」が歌われたことは時代の好尚に即したものと見えよう。

（かとうむつみ 本学教授）

（まつもとまなみ 尚綱学院大学教授）